優良賞

夢の樹

国　籍	中国
職　種	プラスチック成形
実習実施者	城東テクノ株式会社
監 理 団 体	房総振興協同組合

唐　　冠　禹
TANG GUANYU

夢はダイモンドの様に輝き、星屑の様にキラキラしている。夢があるからこそ、人生は素晴しいものになる。夢を追いかけると同時に、辛酸苦楽を味わえるし、たくさんの事も学べる。

子供の頃には、夢に対する明確な意識がなく、初めて「あなたの夢は何ですか」と聞かれた時、思わず「飲食店を経営したい」と答えた。なぜなら、飲食店を開けば、色々な料理が食べられ、友達とも愉快にパーティーをする事ができる。こんな幼稚な思いが子供の頃の私の胸に種を植えた。年を重ねるに連れて、色々な事があっても、この小さな夢はずっと私の心の中に消えずにいた。

しかし貧乏家庭の一人息子として、私は早くに家族全体の責任を負わなければならなかった。十五歳の時、私は中学校を卒業して、工場に入った。毎日の決まった仕事や生活では私の意志を消えず、時間はもうこんなに過ぎ去ったが、胸の奥では私は依然として幼ない頃と同じ夢を見ていた。数年後、家族の経済状況もよくなり、私も工場を出て自分の夢を実現する準備を始めた。

物件探し、内装、自分の理想的な店を開くためには、以前から湧き出ていた色々なアイデアを実現するだけでなく、予想以上にお金と時間を費やすのも必要だった。そしてついに開業の日を迎えた。昔に植えた種はついに大木になった。

その時期は、毎日店にいて老若男女の笑顔を見ると心から嬉しかった。しかし経験不足でその後の営業は様々な問題が生じ、既に軌道修正は難しくなって、問題に気づいた時には赤字だらけだった。どんなに改善しても取り返しがつかないほど悪化していた。そして損失を埋めるために閉店と言う決断をした。まるで巨木が轟々と倒れたように、私の胸も空洞になった。それから私は工場に戻って、冷たい機械に向かって退屈な日々を過ごしていた。夢と言う巨木も枯れてしまった。このまま人生を送ろうと思った時“火花”と言う小説が私を単調な空間から引っ張り出した。

初めて日本文学を読んだが、お笑い芸人である主人公「徳永」の心境や行間に滲み出している日本の風情が斬新且つ繊細で、読み進めるうちにイメージが頭の中に自然と浮び上がっていた。夢が叶ったのは人生の終末ではなく、始まりであることがその時になってようやく分った。枯木に花開くように私の人生も再び希望が燃え上がった。その日から私は仕事に真剣に取り組み始めて、毎日対面する設備も冷たい機械ではなく、巨大な知識の宝庫になった。仕事の合間にも新しいことを積極的に学び、やっと今回の機会を得て、技能実習生になった。

「生きている限り、バッドエンドはない。僕達はまだ途中だ。これから続きをやるのだ。」これは又吉直樹さんの“火花”の一節だ。私はまだ諦めていない限り、これから日本に、夢と言う種をもう一度植えよう！